

専修念仏思想史の再検討—證空と顕意の思想的位置づけを中心として—

中村 玲太

本論の目的

日本中世仏教を論じるにあたり、様々な理念型が示されてきた。法然（1133～1212）や親鸞（1173～1262）などを「鎌倉新仏教」として位置づけ、高い評価を下した鎌倉新仏教（中心）論においては、専修念仏思想の解明が研究の中心課題となるのは当然であった。そこで、法然を継承する者として研究が進められたのは主として親鸞であった。これに対して、本論で検討する法然の直弟・證空（1177～1247）、並びに證空を祖とする浄土宗西山派の教義が、専修念仏思想の展開として十分に検討されているとは言い難い。親鸞と同様に——あるいは別の課題をもって——、専修念仏思想を世に展開させたのが證空であり、西山派を検討することで、はじめて見えてくる専修念仏思想が担った課題があるとするのが本論の立場である。

證空が法然の直弟であることを考えれば、鎌倉新仏教論であれば「新仏教」に位置づけられるはずである。しかし、親鸞のように證空が「新仏教」の騎手として思想上に位置づけられることはなかった。これはおそらく共通認識として、證空が「民衆」よりも貴族に近く、いわゆる旧仏教側の思想に接近するものだと見られていたのが要因としては大きいと考えられる。

鎌倉新仏教（中心）論に対して、顕密体制論を提起したのが黒田俊雄である。あくまで中世仏教の中心は顕密体制側にあるとする理論であるが、この新しい枠組みの中で、黒田はどのように西山派を評したのか。黒田は西山派を「体制回帰」的なものと評し、それ以上の詳論はない。高橋慎一郎が明らかにしたように、諸勢力との間に広範なネットワークを築き、それを駆使しながら活発な活動をしていたのが西山派である。この点で言えば、西山派を顕密体制側に位置づけ、その思想的意義を研究するという方法もあり得るはずである。しかし、證空思想は、鎌倉新仏教論の中で積極的な意義づけはされず、かといって顕密体制論の意義を認めた研究者の中でも十分に省みられたわけではなかった（ただし、顕密体制と葬送を論じる中で、西山派が取り上げられていることは注目すべきである）。

本論の立場は、西山派を顕密仏教に位置づけて思想的意義を解明しようとするものではない。西山派の展開は、やはり専修念仏思想の展開であるとみなすのが本論の立場である。しかし、これは「旧仏教」とは断絶した「新仏教」として、證空思想を位置づけ直すものではない。證空は従来の諸宗を否定するものではないからである。ただ、それは顕密仏教への「体制回帰」ではなく、従来の諸宗が根幹に位置づける仏説は、専修念仏思想によってのみ

実現可能だと主張するのが證空である。

従来、「旧仏教」側に接近すると考えられていた證空における修行論、諸行の理解、あるいは如来と衆生との関係（一体性）をめぐる議論は、当時の聖道諸宗の仏教理解に厳しい批判の眼差しを向けるものであることにまず注目すべきである。さらにその上で證空は、聖道諸宗で仏説に基づいて論じられる教義を不要と切り捨てるのではなく、諸行などの問題を含めた従来の教義を専修念仏思想の立場から解釈し直す——他力に依る仏説の実現を訴えるものである。専修念仏思想は他の仏教を否定する排他的な思想だと見られていたのであり、このような歴史的課題を踏まえての證空の主張である。ただ、證空は既存の宗派を否定するわけではないが、他力を忘れた諸宗派の現状に対して痛烈な批判を行うのであり、これを一つの仏教改革運動として位置づけることも可能であろう。既存宗派の教義を容認・護持するか否かといった単純な二項対立の図式では了解することのできない、専修念仏思想史の展開があるのである。

理念型の提示によって進展する研究があるのは確かであるが、わかりやすい図式からは零れ落ちる中世仏教の形態があるのも確かなのである。まさに法然亡き後の京都仏教界で権勢を誇った西山派とはそのような存在である。こうした点を押さえた上で、専修念仏思想の展開として、證空思想、西山派を検証すべきなのである。以上の観点から、證空思想、西山派の思想的位置づけを中心に、専修念仏思想史の再検討を行うのが本論の目的である。

## 本論の構成

以上の本論の課題を達成する上で、證空思想の解明は前提となる。特に「聖道門的」とされた證空の思想についてまず再検討を行った（第1部「證空思想の再検討」）。また、證空没後の西山派の展開として、本論では京都仏教界で注目された顕意（1238～1304）の思想に着目して、仏教界における西山派の動向を検証した（第2部「道教顕意に見る西山義の展開」）。さらに、西山派は活発に他宗派との交渉があり、また後世にもその影響を及ぼしている。そこで補論として、西山派と他宗との交渉、西山派の他宗への波紋も検討課題とした（第3部「西山義から／への波紋」）。以上を大筋として、本論の構成は以下の通りである。

**第1部「證空思想の再検討」** 第一に、證空と諸行の問題について検討を行った（第1章「證空に見る浄土教的実践とその評価の問題」）。これはまさに證空が「聖道門的」と評されてきた問題である。確かに、證空は「念仏」以外の諸經典に説かれる善行（＝諸行）を無価値だとして排除しない。しかしその主張は、諸行は他力に依ってはじめて実現されるものということが基礎であり、自力の価値を信じる＝自己の罪惡を理解しない聖道門の行者を批判することと不可分な主張であることを明らかにした。また、他力に依る善行とは、旧来の宗教的秩序を決して肯定しないものであることも示した。

この諸行の問題以外にも、證空が「聖道門的」と了解される思想の一つとして、「領解」

の理解がある。證空が「領解」を強調したことを通して、西山義は知的理解を強調し、学風は聖道門的であるなどと主張されてきた。しかし、證空における「解」とは、「信」のことであり、これは当時行われていた「学解」に対する解釈の転換を迫ったものであることを検証した(第2章「西山義における「学解」解釈の転換」)。特に、證空の念頭には、活動圏が近接した明恵(1173~1232)の「解」理解——専修念仏批判としての「解」理解——があったことを示した。

次に、證空における如来と衆生の同質／異質性に関して考究した。法然は「西方の弥陀」に帰依し、自己とは隔絶した如来を強調した。しかし、その直弟である證空については、従来、仏と自己との存在が本質的に同一であることを強調したものの、さらにはいわゆる天台本覚思想に近接するものだと理解されてきた。これに関して、證空発とされる「機法一体」という宗派を超えて受容・批判されたタームの成り立ちについて前提として検証し(第3章「機法一体」説成立の再検討—證空における「往生正覚俱時」説を中心として)、次に、天台本覚思想との関係について論じた(第4章「天台本覚思想と證空——「現生往生」思想の究明を射程に入れて」)。前者の検討を通して、證空が「仏凡一体」や「凡聖一如」といった如来との本質的一体を語る言説に対して批判的な面を強く有することを示し、後者では、證空自身が当時の天台本覚思想を念頭に置き、「現実肯定思想」に対して批判的立場を取る、證空の現実世界・我々の罪悪に対する悲嘆を明らかにした。特に「煩惱即菩提」などは大乘仏教における基礎的な教義であるが、これを「知る」ことにとどまることへの證空の危機感を解明した。また、ここで近年改めて問題となっている「現生往生」と言われる思想について、それも現実肯定思想とは距離を置くものであることを示した。

以上の「往生」は、「見仏」と密接に関わる問題であり、證空の「見仏」理解として、特に議論となっている善導「光台現国」への解釈について、検討を進めた(第5章「證空における「光台見仏」論の成立」)。

證空思想において従来議論されてきたタームとして、「行門」・「観門」・「弘願」といういわゆる特殊名目、さらに「化前序」という語がある。いずれも證空が出世本懐経とする『観無量寿経』に関する西山義特有の理解を示すための教義であるが、これは證空が仏教全体を体系的に位置づけるための用語であり、證空の教相判釈とも言うべき教義である。この特殊名目、あるいは「化前序」の思想背景について、先行研究においてはたびたび天台学の影響が指摘されてきた。本論ではこれを今一度再検討し、両者ともに善導(613~681)を典拠にした主張であると證空自身は認識するものであり、専修念仏が善導に則るものであることを顕かにするのに如何に腐心していたかを論じた(第6章「西山義特殊名目「観門」の成立過程の再検討」、第7章「證空における「化前序」説成立とその展開」)。

最後に、證空の末法思想について検討した(第8章「證空の末法思想——『自筆鈔』／『他筆鈔』の相違に着目して」)。日本仏教の一つの潮流として、単に日本が末法の時代にな

ったことを歎くのではなく、そもそも正法・像法・末法という三時説の枠組みを疑う思想も一定数存在した。證空思想もその一つであり、これ自体、検証を進めるべき問題である。この證空思想についてすでに先学の指摘もあるが、三時説に関して證空の思想的変遷が検証されているとは言い難い。そこで、末法、三時説という基本的な枠組みへの問いを基にして、證空の思想的変遷、そして変遷しつつも一貫した「弥陀本願の通時的救済」への思索について明らかにした。

**第2部「道教顕意に見る西山義の展開」** 顕意の主著である『観経疏楷定記』（以下、『楷定記』と略記）は、善導『観経疏』に対する注釈書である。ただ、「注釈」と言っても、その「注釈」の性格は一様ではなく、「注釈」の実態を検証する必要がある。『楷定記』における「注釈」とは、顕意一人の手によって実現されたものではなく、複数の人——それも西山派内外——との問答・対話を通して成立したことを明らかにした（第1章「顕意『楷定記』と注釈活動——證空『他筆鈔』にも注目して」）。また、これは顕意『楷定記』特有のものではなく、證空や他の西山派の注釈書にも見られる特徴である。特に、自由闊達な議論の場をもとに注釈書が成立していることが注目される。

次に、顕意の京都仏教界での活動状況を検証するため、「四十八問答」、『浄土疑端』の成立過程を明らかにした（第2章「顕意、了恵の「四十八問答」の史料価値について」、第3章「顕意『浄土疑端』成立過程の検討」）。まず、「四十八問答」とは、亀山帝より浄土宗鎮西派と西山派に届いた質問、それに対する応答を示すものである。次に、当時浄土宗内外で議論になっていたいわゆる「諸行本願義」の人師と顕意は対論している。このもととなったのが『浄土疑端』である。両文献ともその成立過程に関して十分な検討がなされているとは言い難い。両文献への検討の結果、顕意の活動状況、対外的な活動の幅の広さが明らかになった。

顕意は天台僧との交渉もあった。證空への見方と近いが、顕意も天台学へ接近した人物であると見られている。確かに顕意においても天台学の影響は否定し得るものではないが、しかし、顕意の天台、浄土の両宗への見方は独特のものである。天台、浄土の両宗は一致するというのが基礎的な立場であるが、あくまでそれは善導に立脚した念仏思想をもとに（両者がそれを共通して説く故に）一致すると主張するものである。すべての行は念仏を離れて存在しない、という見方を顕意は提示するが、これを天台学から論証可能だと考えているのである。こうした顕意の主張が、『註五方便念仏門』において確認できることを示した（第4章「顕意撰『註五方便念仏門』について——浄土・天台「両祖同轍」を中心とした考察」）。

さらに諸宗の一致を強調する点と専修念仏思想の敷衍は、顕意の仏教観全体にも及ぶものである。このことを菊地大樹より近年提起された、教相判釈と〈ひとつの仏教〉という観点から検討した（第5章「他力論と〈ひとつの仏教〉」）。顕意は、「一乗真宗」なる語をもって全仏教が一致することを説く。しかしそれは、法華や真言なども「他力」を説くからであ

る。それを自覚せず、専修念仏思想、あるいは他力思想を批判する聖道門の人師に対して、仏教を理解しないものとして痛烈に批判している。ここには、本来一つである仏説を信じられない、謗法への問題意識もあった。顕意の〈ひとつの仏教〉論は、単なる体制回帰的なものではなく、当時の聖道門の人師に対して大いなる問題意識をもって、他力にもとづく仏教の実現を強調するものであった。

最後に、顕意は中国浄土教の文献もよく読み込んでおり、かつそれに批判的な眼差しを向けている。顕意が投げかける批判をもとに、日中浄土教における新たな問いを発見することも可能であると考え。そこで、「唯心浄土」の問題を取り上げ、これを検討した（第6章「顕意の「唯心浄土」批判」）。顕意は、原理的には「唯心浄土」、心を離れた浄土などないという説を認めるが、一方で「西方の弥陀」の実在性を論理的に考究している。顕意の視点は、「唯心浄土」説に新たな議論を呼び込むものであり、この点を明らかにした。

**第3部「西山義から／への波紋」** 中世において各宗派の教えをまとめ、そのエッセンスを記した仏教綱要書が著された。その仏教綱要書を著すにあたり、新興の「浄土宗」を如何に記述するかが問題であった。批判もある「浄土宗」を日本仏教において如何に位置づけるか。この点において、中世の仏教綱要書は「浄土宗」に対して多様なアプローチから記述している。この「浄土宗」を記述するにあたって、浄土宗西山義が参照されている仏教綱要書がある。今まで指摘がなかったが、東福寺開山・円爾（1202～1280）撰述と伝わる『十宗要道記』、親鸞の玄孫にあたる存覚（1290～1373）『歩船鈔』には西山義の影響が確認できる。ただ、西山義の受容の仕方は一様ではなく、その差によって各仏教綱要書の特徴を見出すことができる。こうした検証から、西山義が歴史的にどのように受容されたかを知ることにもまたできるのである。そこで、仏教綱要書における「浄土宗」の記述を通して、西山義と各宗派との歴史的影響関係を示した（第1章「中世仏教綱要書と浄土宗西山義」）。

次に、西山義——にとどまらず法然門流、あるいは聖道の諸宗に波紋を及ぼした主張として、諸經典に説かれる念仏以外の善行（＝諸行）に依る往生も「弥陀の本願に誓われているから」可能である、とする「諸行本願義」がある。法然の直弟であり、諸行本願義の祖とも見られる長西（1184～1266）が主張した「雑行専修」、それに対する西山義の反駁を検証することで、諸行本願義と西山義との関係について明らかになった（第2章「長西における「雑行専修」をめぐる問題——西山義の批判を中心として」）。

證空に端を発する言葉として「一向他力」がある。「自分で」信じたと思う心も自力であり、罪惡の我々に用意するものなど何一つないという「一向他力」の教説は波紋を呼んだ。この波紋は、法相宗の良遍（1194?～1252）や貴顕をも巻き込むものであった。また、「一向他力」をめぐる、西山義と鎮西義で激しい応答がなされ、かつ西山義内でも異義が噴出している。当時の浄土教をめぐる思想動向を知る一つのタームとして「一向他力」は注目されるものである。これについて證空から検討を進め、「一向他力」の大きな波紋を示した（第

3章「一向他力」の主張とその波紋——證空・良遍とその系譜に注目して)。

西山義、その周縁で、過去仏も含めたすべての仏は「念弥陀三昧」によって成仏したという経文が共有されていた。弥陀は十劫の昔に成仏した、と諸經典で説かれるのであるが、三世諸仏に先行する根源的な仏が弥陀である、という主張が『般舟三昧経』の経文(とされるもの)からなされた。三世諸仏に先行する根源的な仏であれば、単なる十劫の昔に成仏した仏だとは考えられず、ここに證空などの西山義、そして真宗で独自の仏身論が繰り広げられる。また、こうした仏身論の検証は、中国浄土教が弥陀法身説などの仏身論を進展させたのに対して、法然門流には目立った仏身論の展開はなかったとする主張への再検討を促すものである。しかし、そもそも上述の「念弥陀三昧」ということが、『般舟三昧経』に説かれているのか、という文献的な視点からの批判も鎮西義、あるいは諸行本願義からなされた。法然以降の仏身論を考える上で基礎となる視点を、「念弥陀三昧」文を基軸に提示した(第4章「法然門流における仏身論と「念弥陀三昧」文の展開」)。

最後に、近世真宗学における西山義の影響を考察した(第5章「光遠院恵空の西山義受容について——真宗教学史における他派理解と注釈態度」)。本論で特に注目したいのが、大谷派初代講師ともされる恵空(1644~1721)である。近世真宗学を検討するに当たり、当時の学匠が西山義や鎮西義との差異を強調したことが度々取り上げられてきた。しかし、必ずしも他派の否定、自宗の宣揚ということだけが真宗学ではない。恵空は、西山典籍を渉猟し、浄土教を語るに当たり相当数、西山典籍を引用している。批判的に西山義を取り上げるための引用ではなく、あくまで解釈の参考として、時には親鸞の解釈と並列させている。このような恵空の学問的態度について検証し、近世における西山義受容についての一端を示した。

## 総結

證空は、仏教一切の経論において「罪をつくることは問題にならない」などと説く箇所は一つもないとしている(『女院御書』)。仏説として廃悪修善が勧められていると受け止めるのは、ごく自然である。諸行、すなわち諸經典に説かれる善行の価値を認めなければ(それが異端かどうかは置くとして)改革派である、認めれば体制回帰であるという価値判断に抜け落ちているのは、そもそも諸行の価値を認めるのは「仏説」だということである。勿論、そうした仏説のある中、念仏一つを往生の行として説き示す法然の選択思想が画期をなすものであることに間違いはない。しかし、仏教を信奉する者として、仏説たる廃悪修善を無視することもまたできないのである。

本論から見えてきたことは、こうした修行論だけではなく仏教經典が説く様々な教えが専修念仏に依って如何に実現されるかを考えたのが、證空や顕意であったということである。こうした従来注目されてこなかった専修念仏思想の展開の一端を本論では明らかにしたものだと言える。